
ごあいさつ



地域づくり・文化支援部門長 古池 嘉和

平成17年10月に富山県内の国立三大学が統合され、新富山大学として再出発した際に文化を軸とした地域づくりで地域社会に貢献していくことを目指して、高岡キャンパスに当部門（当時は、「地域づくり・文化支援センター」）が設立されて9年になります。

この間を振り返ると、日本も大きく揺れ動いた時期でもありました。総人口の減少というこれまでに経験したことのない局面に入り、同時に進む市場化の強い作用で、一段と首都圏に諸資源が集中する事態になっています。反面、地方は活力が低下し、待望久しい北陸新幹線の金沢開業も、こうした首都圏一極集中をさらに大きく加速させる要因となりかねず、開業後には一段と疲弊することが懸念されます。

また、この間、平成の大合併や「公の施設」における指定管理者制度など、厳しい財政運営を背景とした効率性を重視する政策が導入され、地方の中での格差も広がっています。例えば、富山市はコンパクトシティのモデル都市として全国的にも名高い先進地ではありますが、これとて効率化の流れと合併した周縁的地域の文化と、どのように調和させていくのが大きな課題として我々の前に提示されています。

私たちが支援する文化とは、中々に“メンドクサイ”ものであり、手間暇かけて育てていくものです。それを育む主体を支援していく部門には、さらに時間のかかる粘り強い仕事が求められます。こうした中で、「魚津三太郎塾（平成23年～）」、「舟橋村人口問題プロジェクト（平成25年～）」、「たかおか共創ビジネス研究所（平成26年～）」など、県内の各地域において、人材を育成する視点でプロジェクトを展開してきました。

地域づくり・文化支援部門は、地域の中に凝縮する暗黙的な知と、大学で蓄積している学術的な知を融合させ、現場の知を普遍化する知的プラットフォームを形成し、地方圏で先鋭化する諸問題に向き合っていく組織です。それこそが、この地域が伝統的に有してきた相互扶助の精神である結を、知識を媒介とする「知識結」として再編成することにはなりません。

知識を縁とした文化支援と、それによる地域づくりは、基盤となる研究の蓄積とともに、それを実践する人材育成が必要であり、成果が出るまでに多くの時間を要します。今後とも、地域の皆様のご指導、ご鞭撻、ご協力を賜りますようお願いいたします。